様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００６２８

研究課題名（和文）室町後期・江戸初期に於ける地方成立古記録・古文書の記録語・記録語法の記述的研究

研究課題名（英文）A Descriptive Study of Words and Usage in Regionally Used Ancient Records and Ancient Documents in the Late Muromachi and Early Edo Periods

研究代表者
堀畑　正臣（HORIHATA, Masaomi）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・名誉教授

研究者番号：３０１９９５５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：室町後期・江戸初期の地方成立の古記録・古文書に於ける記録語・記録語法の記述的研究によって以下の事を明らかにした。
①室町後期の島津家の部将上井覚兼の『上井覚兼日記』と江戸初期、秋田藩の奉行職・家老職を歴任した梅津政景の『梅津政景日記』を調査し、室町後期～江戸初期の京都の公家山科言経の『言経卿記』と比較してその差異を見いだした。
②16～17世紀前半の地方成立古文書で九州の『相良家文書』『大友史料』『島津家文書』や東北の『伊達家文書』、越後の『上杉家文書』、戦国遺文から関東の『後北条氏編』を調査し、中国『毛利家文書』や九州の『阿蘇文書』と比較して、その地域に特徴的な表現や記録語を見いだした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
①室町後期の鹿児島の『上井覚兼日記』と江戸初期、秋田の『梅津政景日記』を調査し、室町後期～江戸初期の京都公家の『言経卿記』と比較して、その差異を見いだした。②16～17世紀前半の地方成立古文書の九州の『相良家文書』『大友史料』『島津家文書』や東北『伊達家文書』、越後『上杉家文書』、関東の戦国遺文『後北条氏編』等を調査し、中国『毛利家文書』や九州『阿蘇文書』等と比較し、地域に特徴的な表現や記録語を見いだした。
以上の点から、日本語学分野で地域に特徴的な表現や記録語が明らかになり、古記録・古文書の記録語・記録語法の研究が進展した。また、日本語辞書の記述の詳細化と日本史での文書等の読解の助けになる。

研究成果の概要（英文）：I conducted a descriptive study of words and usage in ancient records and ancient documents on the use of regions in the late Muromachi and early Edo periods, and I discovered the following findings:
① I researched 『上井覚兼日記』, a commander of the Shimazu family in the late Muromachi period, and 『梅津政景日記』, a magistrate of the Akita Domain in the early Edo period. I compared them against 『言経卿記』, a court noble in Kyoto from the late Muromachi period to the Edo period, and I found differences.
② I researched regionally used old documents from the 16th century to the first half of the 17th century, including 『相良家文書』『大友史料』 and 『島津家文書』from Kyushu,『伊達家文書』from Tohoku,『上杉家文書』from Echigo, and 戦国遺文『後北条氏編』from the Kanto region. I compared these documents against 『毛利家文書』from Chugoku and 『阿蘇文書』from Kyushu, and I discovered expressions and words used in ancient records that reflect distinctive characteristics from the regions.

研究分野：日本語学

キーワード：室町後期～江戸初期の古記録・古文書　記録語と記録語法　地域に特徴的な表現・記録語　梅津政景日記　上井覚兼日記　言経卿記　上杉家文書・伊達家文書　戦国遺文『後北条氏編』

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

## １．研究開始当初の背景

2007 年に拙著『古記録資料の国語学的研究』（清文堂出版）を刊行し、2007～2009 年に（１）「室町前期の古記録に於ける記録語・記録語法の研究」で室町前期の中原師守『師守記』〔記録 1339～1374 年〕、三条公忠『後愚昧記』〔記録 1361～1383 年〕と室町中期の伏見宮貞成親王『看聞日記』〔記録 1416～1448 年〕の記録語・記録語法を調査検討した。2010～2013 年に（２）「室町中期の古記録・古文書に於ける記録語・記録語法の研究」で、室町中期の広橋兼宣『兼宣公記』〔記録 1387～1428 年〕、山科教言『教言卿記』〔記録 1405～1411 年〕、中山定親『薩戒記』〔記録 1418～1443 年〕、中原康富『康富記』〔記録 1417～1455 年〕と同時期の古文書（東寺百合文書・東大寺文書・高野山文書・大徳寺文書等の〔1387～1455 頃〕）を調査し、2014～2017 年に（３）「室町後期の古記録・古文書に於ける記録語・記録語法の研究」で、『言継卿記』〔記録 1566～1571〕、『兼見卿記』〔記録 1570～1584〕、『上井覚兼日記』〔記録 1574～1586〕、『言経卿記』（記録 1576～1589 迄）の調査研究を進めた。これらの研究によって、室町期の古記録の考察が概略できるようになった。その中で、室町後期の薩摩島津家の『上井覚兼日記』において、京都の古記録とは違う記録語や記録語法があることが判明した。また、『阿蘇文書』『島津家文書』に 16 世紀後半～17 世紀初頭になると九州独特の記録語・記録語法が見られること、地方成立文献の記録語・記録語法は、京都と九州と東北で違いを見せること、江戸幕府の政治基盤が固まる以前の地方の古文書（戦国遺文等）にその地方特有の記録語や記録語法があることなどが見えてきた。

## ２．研究の目的

室町後期から江戸初期の地方成立の古記録・古文書の調査と記述的研究を以下の（１）～（３）の観点で行い、室町後期・江戸初期に地方で成立した古記録・古文書の記録語・記録語法の状況並びに、調査した文献の比較検討を通して、その地方に特徴的な記録語や記録語法を洗い出す。

（１）江戸初期の秋田地方の『梅津政景日記』〔記録 1612～1633 年〕を調査し、記録語・記録語法の記述を行い、室町後期の薩摩・日向で成立した『上井覚兼日記』〔記録 1574～1586 年〕や京都の公家『言経卿記』と比較して、東北と九州と京都の古記録に違いが見られるか調査する。

（２）東北・甲信越・関東・東海・中国・九州の古文書で記録語・記録語法の記述を行い、それを比較して違いがあるのか、地域の独自な記録語・記録語法があるのかを調査する。

（３）室町中期の京都の古記録・古文書の記録語・記録語法が室町後期から江戸初期の地方成立の古記録・古文書と何が共通し、何が異なるのか。また、地方成立の古記録・古文書には、京都で使用された記録語・記録語法の古い用法や意味が残っているのかを調査する。

## ３．研究の方法

以下の調査観点１～６で、江戸初期の『梅津政景日記』〔記録 1612～1633 年〕、室町後期の九州鹿児島の『上井覚兼日記』と京都の公家山科言経の『言経卿記』を調査し差異を検討する。

また、大日本古文書『伊達家文書』『上杉家文書』『毛利家文書』、古文書『越佐史料』や『大友史料』の 1500～1650 年代を調査し記述研究を行い、大日本古文書の『島津家文書』『阿蘇文書』『相良家文書』との違いや東北・甲信越・関東・東海・中国の古文書との違いを明らかにする。

戦国遺文の『後北条氏編』『今川氏編』『武田氏編』を調査し、大日本古文書『島津家文書』『阿蘇文書』『相良家文書』と比較検討する。その他、これまでの全体的なまとめを行い、地方成立の古記録・古文書の記録語・記録語法等をまとめる。

**調査観点**

１．地方成立の古記録や古文書に於ける「記録語（和化漢語と和製漢語）」の調査

２．地方成立の古記録や古文書に於ける「記録語法」の調査

３．「異名と唐名」の調査　　／　　４．「病の語彙」の調査

５．古記録・古文書の記録語・記録語法とその地域の漢語系方言の関係

６．地方成立の古記録・古文書文献で特徴的な点を調査

## ４．研究成果

### 研究目的（１）について

### ①『梅津政景日記』の記録語・記録語法

『梅津政景日記』の（ａ）文章・文体は、日本語の語序形式に一部返読語の句構造を取り込み、「以前ニ、下へ」等格助詞を小仮名で表記する形式で漢字平仮名交り文である。（ｂ）会話の構文は、「申分ハ、『～』由申候」か「申分ハ、『～』と申候」の形式である。返読語句も「如御例之」「不申」「被申」「可出由」「無御座」等で語句の長さも短く熟語的である。「有り」は「委籠帳ニ有」のように文末に来る。（ｃ）複文は、「～間、～處ニ／處ヲ」や「～候へとも、～間、」等の複文形式が多くある。「～間、～間」もある。（ｄ）表記は、日記の初年度には「於い来ニハ（以来ニオイテハ）」「御存不被知故（ゴ存ジ知ラレザル故）」「不届成人於有之ハ（不届キナル人コレ有ルニオイテハ）」等、難読表記もある。『梅津』では、文章表記や会話形式の記述が日本語の語順に近づく。（e）語法は、節を作り複文となる形式名詞に「～間」「～處ニ/ヲ」の他に、句になる「上・内・儀・ためニ・段・通・分・外（ホカ）・故・由・様ニ」等がある。接続詞に「左候ハバ・左候へバ・さらば・乍去・然處ニ・然共・然ハ」等が見える。接続助詞に「～候へば・～候へとも」がある。「併（シカシナガラ）」は逆接の接続詞である。（ｆ）敬語は、謙譲語に「約束致」「籠者致」「慮外致」等の「～致」類と「差越申」「相渡申」「物語申」等の「～申」類、「罷通」「罷立」「罷成」等の「罷～」類が見える。「罷～」は「被罷帰」「被罷越」のような「被＋罷～」もある。この他「被参」「被申」も尊敬語「被」＋謙譲語「参／申」で目上の人に使用する。「被賜・被給」はなく（「給ふ」あり）、「被下・御～被下」や「差上」がある。「御～被成」「御～有」（少）「～御座候」「被為～（～セラル）」「以（モテ）～被（ラル）～」（少）も見える。（ｇ）語彙は、中世後期京都の古記録に使用された記録語「雅意・計会・活計・入根・籌策・比興・秘計・以外・与奪」が見えない。「不届・用所・才覚・算用・籠者」や鉱山用語（間分・赤湯・ろかす）がある。「糸＋知＝調ベル意」や「塩味を以／塩味致」が独自である。

### ②秋田『梅津政景日記』、鹿児島『上井覚兼日記』、京都『言経卿記』の比較

秋田の『梅津政景日記』、九州鹿児島の『上井覚兼日記』、京都の公家山科言経の『言経卿記』を調査し、比較検討した結果を示す。（以下、『梅津』、『上井』、『言経』と略す。）

（ａ）『上井』に見える『（ＡからＢ〔へ／が〕）「被賜・被給(タマワラル)」』（ＡもＢも話し手〔書き手〕より上位者で、三人称もしくは二人称で一人称ではない）の「被賜・被給(タマワラル)」（参考文献①）が江戸期の『梅津』や室町後期の『言経』には見えない。室町後期の京都の『言経』には「被賜」３例、「被給」２例が見えるが、これらは一人称側がもらう（戴く）意味で「被賜・被給」と表記は同じでも（タマワル)と読むべき例と見なされる。尚、『梅津』には「給（タマワル）」の例が見える。このように表記は同じでも意味用法や読み方が違う場合があることが判明した。

（ｂ）『上井』『言経』『梅津』で「令（シム）」と使役「させ」を見ると次のようである。

室町後期・鹿児島部将『上井』（３巻）　　「令（シム）」　37 例、使役「させ」307 例

室町後期・京都公家　『言経』（７巻調査）「令（シム）」1246 例、使役「させ」　4 例

江戸初期・秋田部将　『梅津』（９巻）　　「令（シム）」　3 例、使役「させ」389 例

「令（シム）」は一人称や三人称でも自分側の者や身分の低い者に使用され、使役の意味ではない。使役の意味では平仮名表記の「させ」が使用される。「令」の性格が変わったのであろう。

（ｃ）「被為〔（サ）セラル〕」と仮名書き「（さ）せらる」を比較すると、以下のようである。

『上井』（３巻）　　：「被為」　１例　／仮名書き「（さ）せらる」335 例
『言経』（７巻調査）：「被為」　０例　／仮名書き「せらる」１例（「見せらる」１例）
『梅津』（９巻）　　：「被為」142 例　／仮名書き「（さ）せらる」43 例

『梅津』では、「ｽ･ｻｽ」を「為」で表記し、「為取申」は「取らせ申す」で「被為持」は「持たせられ」である。以上、三文献で使用状況が異なる（参考文献④参照）。

（d）漢文的語法では、「須（ｽﾍﾞｶﾗｸ）～ﾍﾞｼ」が室町中期までは使用されるが、『上井』『言経』『梅津』には見えない。「豈（アニ）～や」は『上井』に１例見えるが『言経』『梅津』には見えない。「況（イワンヤ）～」は『上井』に９例見えるが『言経』にはなし、『梅津』に「いわんや～」１例が見える。これらは室町中期には見えたものであるが、室町後期・江戸初期には減少する（参考文献④参照）。

**③秋田『梅津政景日記』と鹿児島『上井覚兼日記』で注目される記録語等**

『梅津』で注目される語に「仕合（死ぬ）」や「塩味を以って〔厳しくｶ〕」がある。『上井』特有の語としては「家景（家来衆）・明合（空きｶ）・柴（祭礼）」がある。中世京都の古記録に見え、『上井』にも見えるが『梅津』には見えない語として「涯分・格護・校量・生害・入魂・斟酌」等の語がある。中世の「勝事」は、『上井』では「笑止」になり、意味も「困ったこと」「気の毒な事」に変化するが、未だ「笑うべき事」の意味にはなっていない。『言経』に「笑止笑止」の例（「困ったこと・意に反する」の意）１つ（笑止２例）がある。『梅津』に「笑止」は見えない。『上井』の「弓箭」は「戦さ」の意味だが、『梅津』では「弓矢」の意味である。中世「全て」の意味だった「併」が『上井』『梅津』では逆接の接続詞に変化している。

**研究目的（２）について：各地域の古文書の記録語・記録語法の記述と違いの比較検討**

（a）1500～1650 年の『相良家文書』では、『島津家文書』と共通する九州方言的語句「案利・順逆・閉目」等が見られたが、『相良家』『島津家』の文書や『上井覚兼日記』に見える「篇目（へんもく）〔喧嘩やもめごと等の訴訟〕」の意味での使用は、九州の古文書特有と思われ、奥州『伊達家文書』、越後『上杉家文書』、戦国遺文『後北条氏編』等には見えない。「立柄〔主に戦の状況、様子〕」も、九州や中国地方の古文書に見られる語であることが確認できた。

（b）16 世紀の戦国遺文『後北条氏編』で特徴的なものとして、「横合（之儀）〔手順・道筋を無視して無理を押し通そうとする〕」がある。「横合」は西日本や九州の古文書には例が見えず、東日本の古文書用語である。このほか辞典類に掲載のない「手苦労」という語も見つかった。

（c）『上杉家文書』では、「此等旨断而可申届之由候」（199 倉俣実経外五名連署奉書、一巻 204 頁）のように「断而（だんじて）「必ず・きっと」の意」が７例見える。これは『伊達家文書』、『武家家法Ⅱ』「328 北条氏陣中法度写」、小和田哲男監修・鈴木正人編『戦国古文書用語辞典』の「鑁阿寺文書」等に各１例見え、東国古文書用語であろう。小学館『日国大』では明治以降の用例をあげている。また、「加世義 4 例・嘉世義 1 例」（勤めはげむこと）は表記が「稼・かせぎ・＊（峠の山が手偏）」と種々だが、東国古文書類に見える表現である。「御家風」は『上杉家文書』では、「一族の主立った者」の意で使用される。打消を伴う「毛頭」は全国の古文書に見えるが、早い例は『上杉家文書』の享禄３年（1530 年 12／7）の「致還往以来、毛頭無疎意候処」である。「彼牢人衆被官中野ニ相残候者共、露色候処」の「露色」１例があった。

（d）『伊達家文書』の「塩味（塩は旧字体）」「面馳走〔見参の意〕」、『相良家文書』の形式名詞「番・辻・通」や「仁躰（部将の意）」等、地方古文書に特徴的な語や語句が見える。

（e）「今後の忠節の依頼」表現として、畠山尚順「彌馳走頼入候」、北条氏綱「彌可勵戦功者也」、北条氏康「彌可走廻候」「彌可相〔＊かせぎ（峠の山が手偏）〕候」、足利義教「彌憑思食候」、（大友）宗心「彌御忠勤肝要候」等があり、地域や人によって表現法が多彩である。「後

で詳細に」という表現にも「委細～」「巨細～」「万端～」と人や地域で差異が見える。

**研究目的（３）について**

**①室町中期の京都の古記録・古文書の記録語・記録語法が室町後期～江戸初期の地方成立の古記録・古文書にどのように取り込まれているか**

これまでの室町期の古記録・古文書の調査を踏まえ、室町中期の古記録で使用される記録語 50 例を取りあげ、室町後期の抄物資料、キリシタン資料（天草版平家・イソポ）、江戸初期の狂言資料、室町後期・江戸初期の古記録資料と比較して、室町中期の古記録と室町後期・江戸初期の古記録の違いや抄物資料や狂言資料との重なりや違いなどを調べた。室町中期には見えた「突鼻、存内、経廻、与奪、参差、比興、活計、歓楽（病）、計会、秘計（金策）」等が『上井』『言経』『梅津』には見えない。（令和３年 10／24 開催「日本近代語研究会 第 386 回 2021 年度秋季発表大会」講演資料参照、活字化は今後の予定）。また、禅僧の『碧山日録』に見られる「五山文学用語」（営弁・海西・火浴・関左）に言及し、室町中・後期の公卿等の古記録との違いも指摘した（参考文献④参照）。

**②地方成立の古記録・古文書に室町中期以前に京都で使用された記録語・記録語法の古い用法や意味が残っているか**

先に研究目的（１）の②（ａ）に挙げた、『上井』に見える『（A から B〔へ／が〕）「被賜・被給(ﾀﾏﾜﾗﾙ)」』の用法も京都のものに比べて古い用法の記録語法である。このほか、『上井』には、先に示した「笑止」や「涯分」等、『言経』に比較すると古い意味での使用が見られる。武士の時代の言葉として、「見相ニ」（見つけ次第）「廉かましき」（粗暴で、やたら難癖をつけ非難する）「立柄」「横合」等を地方の古記録や古文書から見出した（参考文献③参照）。

このほか、『大友史料』では、特有な記録語・特異な意味として「打渡・江湖・押置・懇預・立柄・調儀・調法・手遣・浮沈」等や「挌護／覚悟」の混淆や「涯分」「誘」「順逆」等も採取された。意味・用法・分布について、他地域の古文書との比較を行なうサンプルとして「涯分」「左道」「時宜」「入眼」「生涯」「勝事」「調儀」「調法」「取懸」「働・動」「走廻」「見合」等の古文書用語を洗い出した。今後も比較検討を行う所存である。

**③「異名と唐名」と「病の語彙」：調査観点の３と４**に挙げた「３．異名と唐名」と「４．病の語彙」については、『梅津』に「仕合（死ぬ）」の語が見えたほかは、室町中期の京都の古記録に比べ、地方の古記録・古文書では特筆するものがなかった。人名を唐名で言うのは多く見られるが、「異名と唐名」と「病の語彙」は、地方の古記録・古文書では低調であった。

**④観点５**の地域の漢語系方言は、「笑止」は先の（１）③参照。「徒然」は『上井』13、『言経』１、『梅津』０例。「雅意・我意」は『上井』０、『言経』に「雅意」１、『梅津』に「雅意」０、「随我意」４例。『無慙」は『上井』『言経』『梅津』ともに０例で低調であった。

**⑤その他**、古記録・古文書から「生涯」と「生害」の用例を集め、「生害」表記の出現とその意味を論じた（参考文献②参照）。

**〈参考文献〉**：①堀畑正臣（2021．3）「『上井覚兼日記』における「被賜・被給」をめぐって」（『筑紫語学論叢Ⅲ』、風間書房）．②堀畑正臣（2023.5）「「生害」表記の出現とその意味―「生涯」から「生害」へ―．国語国文，第 92 巻 第５号，京都大学文学部国語学国文学研究室，臨川書店，50－70．③堀畑正臣（2023.8）報告１「「武士の時代」と古文書・古記録の言葉」．令和四年度オンライン大会シンポジウム報告．シンポジウムテーマ「「武士の時代」と国語・国文学」田口寛・堀畑正臣・鈴木元・久保田啓一．『西日本国語国文学』，第 10 号，西日本国語国文学会，107-114．④堀畑正臣（2024．3）「室町中期～江戸初期の古記録に於ける文章・記録語・記録語法（上）」『国語国文学研究』第 55 号、熊本大学文学部国語国文学会．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>堀畑正臣 | ４．巻<br>93巻　6号 |
| ２．論文標題<br>「怨〔あた〕（ 寃〔あた〕）を結ぶ」と「恨みを結ぶ」をめぐって | ５．発行年<br>2024年 |
| ３．雑誌名<br>国語国文　京都大学文学部国語国文学研究室 | ６．最初と最後の頁<br>印刷中（43－63） |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>堀畑正臣 | ４．巻<br>55号 |
| ２．論文標題<br>室町中期～江戸初期の古記録に於ける文章・記録語・記録語法（上） | ５．発行年<br>2024年 |
| ３．雑誌名<br>国語国文学研究　熊本大学文学部国語国文学会 | ６．最初と最後の頁<br>1－26 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>堀畑正臣 | ４．巻<br>92巻　5号 |
| ２．論文標題<br>「生害」表記の出現とその意味―「生涯」から「生害」へ― | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>国語国文　京都大学文学部国語学国文学研究室 | ６．最初と最後の頁<br>50－70 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>堀畑正臣 | ４．巻<br>第10号 |
| ２．論文標題<br>シンポジウム「「武士の時代」と国語・国文学」：報告1「「武士の時代」と古文書・古記録の言葉」 | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>西日本国語国文学（西日本国語国文学会） | ６．最初と最後の頁<br>107-114 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>堀畑正臣 | 4．巻<br>58号 |
| 2．論文標題<br>『大乗院寺社雑事記』の「生涯」（例45～例137）の用例と意味解釈 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>国語国文 研究と教育，熊本大学教育学部国文学会 | 6．最初と最後の頁<br>80－105 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>堀畑正臣 | 4．巻<br>16－1 |
| 2．論文標題<br>〔書評〕田中草大著『平安時代における変体漢文の研究』 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>日本語の研究 | 6．最初と最後の頁<br>93－100 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　5件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>堀畑正臣 |
| 2．発表標題<br>「怨〔あた〕（ 寃〔あた〕）を結ぶ」と「恨みを結ぶ」をめぐって |
| 3．学会等名<br>第132回　国語語彙史研究会（2023年9月30日） |
| 4．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>堀畑正臣 |
| 2．発表標題<br>「怨〔あた〕（ 寃〔あた〕）を結ぶ」と「恨みを結ぶ」をめぐって |
| 3．学会等名<br>第296回　筑紫日本語研究会（2023年8月17・18日） |
| 4．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>堀畑正臣 |
| ２．発表標題<br>武士の時代と古文書・古記録の言葉 |
| ３．学会等名<br>第72回　西日本国語国文学会（2022年9月10日）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>堀畑正臣 |
| ２．発表標題<br>「生涯」から「生害」へー「生害」表記の出現とその意味をめぐってー |
| ３．学会等名<br>第292回　筑紫日本語研究会（2022年8月18日） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>堀畑正臣 |
| ２．発表標題<br>室町中期～江戸初期の古記録・古文書に於ける記録語・記録語法 |
| ３．学会等名<br>日本近代語研究会　第386回　2021年度秋季発表大会　講演（2021年10月24日）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>堀畑正臣 |
| ２．発表標題<br>記録体の文章の変遷をめぐって |
| ３．学会等名<br>令和2年度　熊本大学教育学部国文学会（2020年11月3日） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>堀畑正臣 |
| ２．発表標題<br>古記録（記録体）の文章史・文体史の構想 |
| ３．学会等名<br>令和2年度　熊本大学文学部国語国文学会（2020年10月31日）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2020年 |

〔図書〕　計3件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>日本漢字学会 | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>丸善出版 | ５．総ページ数<br>621 |
| ３．書名<br>漢字文化事典：（執筆；記録体の文体史； 240-241頁） | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>筑紫日本語研究会 | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>風間書房 | ５．総ページ数<br>513 |
| ３．書名<br>筑紫語学論叢Ⅲ：（執筆『上井覚兼日記』における「被賜・被給」をめぐって；83－106頁） | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>坂口至教授退職記念日本語論集刊行会 | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>創想社 | ５．総ページ数<br>318 |
| ３．書名<br>坂口至教授退職記念　日本語論集：（執筆「生涯」の意味変化ー『看聞日記』と『大乗院寺社雑事記』の比較を通してー；（1）－（27）頁） | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|